

当日ではなく平時

あの日、巨大な津波を目の前にして、冷静に行動できた人は何人いたでしょう。未体験の恐怖の中であって、それは不可能に近いと考えるべきです。大きな災害が襲ったとき、人間にできることはごくわずかです。そして、意思決定が遅れるほどパニックは大きくなります。

避難の必要性を感じている先生も「ここで大丈夫」という先生もいました。いろいろな意見があるのは当然です。ただ、それはパニックの中で議論することではありません。あらかじめ決まっていれば「逃げるかどうか」「どこへ逃げるか」の議論は省くことができます。

高裁判決は「当日」の行動ではなく「平時」の取組みの問題を指摘しています。子どもを救いたくない教師はいません。津波が迫る中、必死だったはず。無念だったはず。でも、津波が目の前に迫ってからでは遅いのです。

本気のマニュアルはシンプルになる

マニュアルは、教育委員会には提出されていたものの、職員間で共有されていません。当然、訓練に反映されることもありませんでした。教育委員会も提出されたマニュアルの点検・指導をしていませんでした。

防災に限らず、学校では毎年、提出のためのマニュアル、計画のための計画が数多く作られます。事故や問題が起こる度に、会議や通達、指針が増えるだけでは本末転倒です。分厚い冊子やパソコンのデータが命を守るものではありません。それらは時に子どもの命を守る使命を見えなくします。

学区内に海があり、川のそばに建っている学校の津波避難マニュアルに、具体的な避難場所を一行書き込むために必要なことはなんでしょう。そんなに複雑なことでしょうか。

ハザードマップを信用してはいけないのか

高裁判決では、校庭すぐ脇の山ではなく700m離れた「バットの森」を避難場所に定めるべきだったとしています。この部分は重要です。

ハザードマップで津波による浸水が予想されていた釜谷地区。同じ海拔なのに大川小は浸水しない想定で避難場所になっていました。学校を避難場所にできれば校庭脇の山を整備する必要はありません。長面の体育館もそうです。結果的に、学校や体育館を避難場所にするためのハザードマップになっています。「バットの森」には当時、登るための道がありました。

判決は「ハザードマップは結論として誤り」と指摘していますが、それは数字的なものよりも、運用の仕方に対する警鐘といえます。ハザードマップには「浸水の着色のない地域でも、状況によって浸水する恐れがありますので、注意してください」との記載があります。そもそも区域外が安全だと断定するものではないのです。

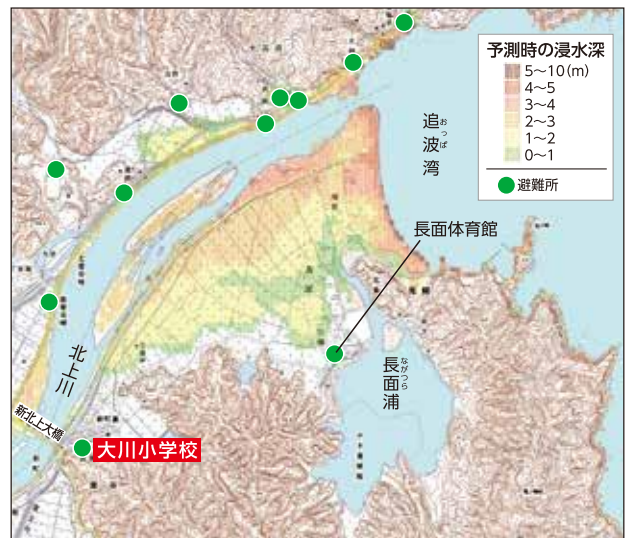
どんなに科学が発達しても想定には限界があり、誤差も生まれます。ハザードマップは安心マップではありません。そのことを踏まえた上で、命を守るため、有効に活用していかなくてはなりません。

避難の 意思決定までの議論

- ① 逃げるかどうか
- ② どこへ逃げるか
- ③ 避難開始

避難の**決定**が遅れるほどパニックに陥りやすい。パニックになる前に避難開始すべき。

その場の判断だけでの避難も不可能ではないが、事前の備えによって①もしくは①②の議論を省くことができる。事前に備えていない場合は、①から議論しなければならない。



宮城県の当時の津波ハザードマップ

津波は大川小には到達しない想定。長面の体育館もギリギリ浸水域外。また、北上川は越流しても、富士川は越えない想定だったが、実際は低くて細い富士川が先に溢れた。



バットの森 登り口

「逃げたけど津波は来なかったね」でいい

多くの学校は、津波到達のだいぶ前、あるいは結果的に津波が到達しなくても、念のために避難しました。一方で、備えが不十分で避難しなかったが、津波が到達しなかったので助かったという学校も少なくありません。ちょっとしたことで結果は逆になっていたかもしれません。

「備えがずさんだった」だけで済ませるべきではありません。特別な場所で起きた特別な出来事ではないのです。なぜこのような状況になったのかをわが事に置き換えて考えなければなりません。

私たちには地震も津波も止めることはできません。重要なのは、津波が到達するかどうかではなく、避難するかどうかです。「逃げたけど津波は来なかったね」でいいと思います。



本質は向き合いにくさの中に

じっとしゃがんでいた校庭はどんなに寒くて、怖かったでしょう。黒い津波を見たとき何を思ったでしょう。事実に向き合い、伝えることは容易ではありません。夢であったならどんなにいいでしょう。

専門家も教育関係者も、踏み込んだ議論を避け、検証が進みませんでした。教育関係者の間でタブー視されていたという話も耳にします。事実の解明も、伝承活動も、体制作りにまず時間がかかります。センセーショナルな言葉が一人歩きしてしまうことも少なくありません。この場所で宮城県の校長研修会が行われるまで10年近くかかりました。

この向き合いにくさこそ共有すべきです。私たちはそこから目を背けがちです。他人任せ、先送りにし、取り返しがつかなくなって後悔します。

ここはつらく悲しい場所であると同時に、大切な場所でもあることを誰もが知っています。分かっているのに動かないままでいたら、誰も声を上げないままでいたら、子どもたちや先生はなんと思うでしょう。

失われた命は戻ってきません。せめて、よりよい未来につながる小さなきっかけをこの場所から生み出せたらと願います。

いつもと同じ日に



今年はとても穏やかな天気。

去年は大風で大変でした。

3月11日が特別な日となって10年です。

多くの人がこの場所に足を運び

いくつもメディアの取材がありました

3月10日も3月12日も、実はそんなに変わらない日。

去年も、10年前も、来年も再来年も。

忘れないように。

あの日も

いつもと変わらない日だったこと。

2021.3.11 早朝